

●徹底した指示とていねいな解説——別府氏ならではの製作マニュアル

これは、本誌でお馴染みの別府俊幸氏による「ヘッドフォンを鳴らすことのできるプリ（ライン）アンプと小出力ながら高品位のパワー・アンプの製作記事」の本です。単なる製作記事ではなく、“キットの製作マニュアル”といえるくらいに徹底した指示とその根拠を、こと細かく説明しています。初心者に限って根拠の乏しい“音をよくする裏技”に飛びつきやすいことを、教育者である著者はよく知っていて、四の五のいわずに、厳密に実行させるべく作られた指示書になっています。

とにかく指示を守ってもらわないと、初心者が市販品レベルの音のするアンプなど作れるわけがありません。コンスタントに“音が出せる”までには少なくとも10年はかかるものなのです。現状は、いわれたとおりには作業すればかならず部品代を上回る“水準の音”が出せる製作マニュアルが求められているのです。

アンプ・キットにトランジスタ回路がほとんどないのは、管球アンプのように、つなぎさえすれば一応音が出るような生やさしいものではないからです。トランジスタ・アンプこそスクラップ・アンド・ビルドを繰り返して音を煮詰める必要があるのです。

こうしてみると、音のグレードを上げるほど、また作り手である読者の経験が浅いほど、筆者の負担が重くなる理屈です。この点で著者はまさに適任です。音楽好きで、録音された音楽をよりよい音で聴きたいと願っており、アンプを設計するに足る正しい知識が身につについて、音を聴いてアンプの内容を詰めることが苦にならない——別府氏にはこのすべてが当てはまります。

経験があってもせいぜい真空管アンプ・キットを作ったくらいの初心者を読者に想定していると思われ、スピーカーは持っていない、ヘッドフォンだけで音楽を聴いている人にも、ケース込み（基板を除く）で5000円を下回る“梅コース”というのがあって、ハンダづけさえできれば、市販ヘッドフォン・アンプの同じ価格帯のものを上回る音が得られるというものです。ヘッドフォン・アンプもパワー・アンプも基本回路は同一で、主に電源回路の物量とパーツやデバイスの質で“松、竹、梅”3つのグレードが設定されています。パーツの価格も正確に、購入店まで提示されています。



まず、ヘッドフォン用“竹コース”がスタンダード・モデルとの位置づけで、MUSESのOpアンプを使って¥13,234で収まっています。“梅コース”でもこれらのアンプのヘッドフォン端子の音と違うのだと気づき、その違いが重要だと考えた人は予算をひねり出して“竹コース”に手を出すであろうと期待しているでしょう。そして行き着く果てが、自作オーディオ・マニアの道を30年くらい悪戦苦闘して運がよければ辿り着ける“松コース”で、¥48,999のパーツ代がかかります。これより高価なヘッドフォン・アンプはいくらでもありますが、ここまで詰めて設計されたものは多分売っていないでしょう。

察するに、著者は、ヘッドフォン・アンプをリアアンプとして使い、パワー・アンプを作ってスピーカーを鳴らして欲しいのです。音の違いが気になるくらいの人々がヘッドフォンに止まるわけがありませんから…。そして、ここまで来ると、パワー・アンプでもそこそこの市販品では聴くに堪えなくなっているでしょうから、初心者は下手な工夫などせずに著者のいうとおりに自作すべし、ということです。

私もそうですが、音楽好きにこそ聴いて欲しいと著者が期待する“水準の音”は、現状では狂気を孕んだ自作でしか得られませんし、かならず得られるとも限らないのです。それを初心者にやらせようというのが、ここまで徹底した解説と指示になった動機と想像しますが、自前の設計ができるベテランにも、自身の考えかたを整理するよいきっかけになると思います。私は、読んでよかったと思っています。（石塚 峻）